子ども時代の逆境体験と高齢期における貧困・社会経済的状況との関連

ー子ども時代の階層意識、教育歴を調整してー

○ フクロウ社会福祉士相談所　平松　誠（06220）

キーワード3つ：子どもの頃の逆境体験、貧困、格差

１．研 究 目 的

逆境的な子ども時代の体験とその後の健康上のリスクとの関連については様々な研究が行われている．Metzler, Merrick らの研究（2017）によれば子ども時代の逆境的な体験はその後の貧困とも関わっていることが示唆される，としている．そこで，本研究では子ども時代の逆境的な体験と，高齢期における貧困・社会経済的状況との関連について分析を行った．なお，貧困の世代間連鎖の影響を考慮するため，子ども時代の階層意識や教育歴を調整して分析を行った．

２．研究の視点および方法

ＪＡＧＥＳ(Japan Gerontological Evaluation Study)プロジェクトのデータの一部を用いた．2016年に要介護認定を受けていない65歳以上の高齢者276,470人を対象に，郵送法にて自記式調査票を用いた調査を実施した．配布した調査票には3種類あり，今回の分析では「子ども時代の逆境体験」に関する設問が含まれる調査票(配布数34,570人，回収数24,209人，回収率70.0%)に回答したものを分析対象とした．

目的変数として等価所得，主観的な経済状態(以下は主観的SESとする)，生活保護受給の有無を用いた．等価所得については世帯所得を世帯人数の平方根で割った値を用い，200万円未満，200万円以上400万円未満，400万円以上の3つに分けて分析をした．主観的な経済状態については，現在の暮らしの状況を経済的にみてどうかんじていますか，という質問項目を用いて，①大変苦しい，②やや苦しい，③ふつう，④ややゆとりがある，⑤大変ゆとりがある，の5件法で調査した．生活保護受給の有無については，あなたは現在，生活保護を受給していますか，という質問項目を用いて，①受給していない，②受給している，③現在申請中，の3件法で調査し，現在申請中については受給していないとまとめた．

説明変数として子どもの時代の逆境体験を用いた．子どもの時代の逆境体験については，18歳になるまでの間に以下の経験をしたことがありましたか，①親がなくなった，②親が離婚した，③親が精神疾患を患っていた，④父親が母親に対して暴力をふるっていた，⑤親にひどく殴られてケガをした，⑥親から傷つくことを言われたり侮辱されたりした，⑦経済的に苦しかった，といった質問項目に対してはい，いいえの2件法で調査を行った．なお，個々の項目ごとの分析と，7項目で「はい」と答えたものを合計した数で分析を行った．

調整変数としては，性別，年齢，子どもの頃の階層意識，教育歴をもちいた．子ども時代の階層意識については，あなたが15歳当時の生活程度は，世間一般からみて，次のどれに入ると思いますか，といった質問項目に対して，①上，②中の上，③中の中，④中の下，⑤下の5件法を用いて調査をし，上と中の上，中，中の下と下をまとめて分析を行った．

分析は，変数ごとにクロス集計を行った．また，性別・年齢や子どもの頃の経済状態や教育歴の影響を考慮するために層別化してクロス集計を行った．

３．倫理的配慮

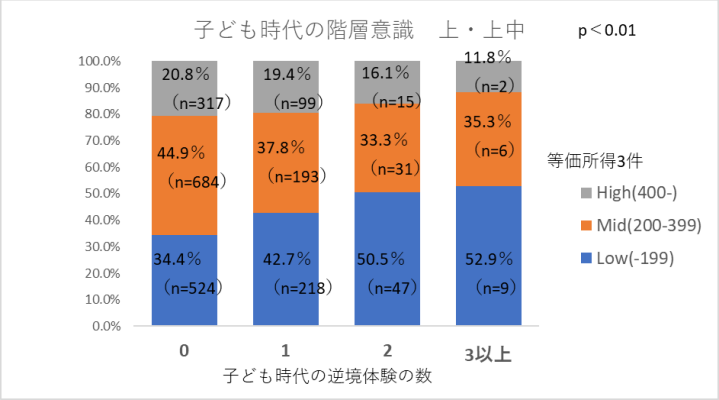
本調査は国立長寿医療研究センター（受付番号992-2 平成29年9月26日），千葉大学大学院（受付番号2493 平成29年8月24日）の研究倫理審査委員会の承認を経て行われた．なお，本発表に関して，開示すべき利益相反はない。

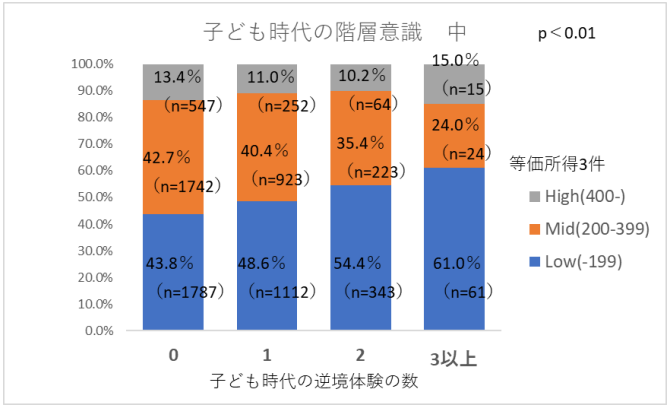
４．研 究 結 果

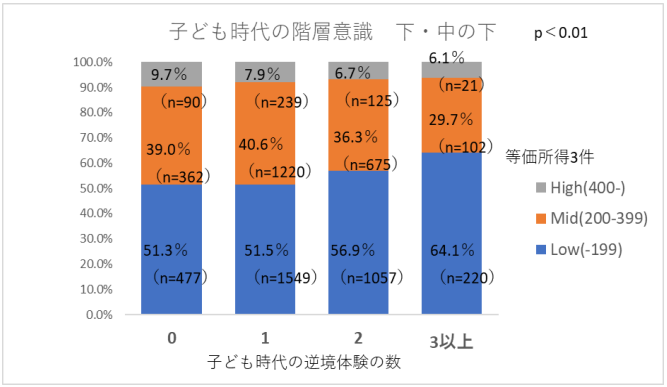
分析対象者の性別は男性が45.7%（n=10143)、女性が54.3%（n= 12074）であった．年齢は75歳未満が56.2%（n= 12488)，75歳以上が43.8%(n= 9731)であった．子ども時代の逆境体験については①親が亡くなったが29.0%(n=6058)，②親が離婚したが 3.0%(n=626)，③親が精神疾患を患っていたが 1.0%(n=216)，④父親が母親に対して暴力をふるっていたが 4.1%(n=854)，⑤親にひどく殴られてケガをしたが 1.4%(n=284)，⑥親から傷つくことを言われたり侮辱されたりしたが5.7%(n=1196)，⑦経済的に苦しかったが43.2%(n=9092)であった．なお，これらを合計したものは，0が41.4%（n=8302)，1が38.2%（n=7649)，2が17.3%（n= 3472)，3以上が3.1%（n=612）であった．等価所得に

ついては 200 万円未満が 49.4%（n= 8494），200 万円以上 400 万円未満が 39.5%（n= 6795），400 万円以上が 11.2%（n= 1921）であった．主観的 SES は大変苦しいが 6.8%(n= 1506)，やや苦しいが 21.5%(n= 4742)，苦しいが 58.0%(n= 12876)，ややゆとりがあるが 10.7%（n= 2385），大変ゆとりがあるが 2.3%（n=501）であった．生活保護受給の有無については受給していない（申請中を含む）が 98.3%（n= 21482），受給中が 1.7%（n= 379）であった．

子ども時代の逆境体験数と等価所得 3 件の関係を分析した結果，子ども時代の逆境体験数が 0 で等価所得が 200 万円未満のものの割合が 42.8%(n=2876)，1 で 50.0%(n=3008)，2 で 56.3%(n=1499)，3 以上で 62.6%(n=300)と子ども時代の逆境体験の数が多いほど，等価所得 200 万円未満の割合が高い，統計学的に有意な関係(p<0.01)が示された．子ども時代の経済状態をごとに分析をした結果においても同様の傾向を示し(グラフ 1，2，3)，いずれにおいても統計学的に有意な関係(p<0.01)を示した．なお，性別や年齢，教育年数で調整をしても同様の傾向が示された．







主観的 SES について分析をした結果，大変苦しいと答えたものの割合が子ども時代の逆境体験の数が 0 で 4.0%(n=330)，1 で 7.4%(n=561)，2 で 9.2%(n=317)，3 以上で 12.4%(n＝75)であり，子ども時代の逆境体験数が多いほど高齢期の主観的な経済状態が大変苦しいとするものの割合が高い，統計学的に有意な関係が示された．子ども時代の経済状態ごとに分析をした結果においても同様の傾向が示された．なお，性別や年齢、教育年数で調整しても同様の傾向が示された．

生活保護の有無について分析をした結果，生活保護受給者の割合が，子ども時代の逆境体験の数が 0 で 0.9%(n=76)，1 で 1.6%(n=118)，2 で 2.9%(n=98)，3 以上で 3.6%(n=22)であり，子ども時代の逆境体験の数が多いほど生活保護受給者の割合が高い統計学的に有意な関係が示された．子ども時代の経済状態や教育年数，性別，年齢ごとに分析を行ったが対象者数が少なく子ども時代の逆境体験が多いほど生活保護受給者の割合が高い傾向は示唆されるものの，統計学的に有意な関連は示されなかった。

5．考 察

子ども時代の経済状態の影響を調整したとしても，子ども時代の逆境体験が多いほど，高齢期における経済的状況が低いことが示唆された．

また，生活保護の受給者の割合については子ども時代の経済状態や教育年数を調整した結果，分析可能な対象者数が少なく統計学的に有意な差が示されない結果が多かったものの，子ども時代の逆境体験の数が多いほど，生活保護者の割合が高い傾向が示唆された．

最後に本調査の限界としては以下の 3 点が考えられる．一つ目は横断分析であるため，逆因果の可能性が考えられる．二つ目は高齢期における貧困，社会経済的状況には他にも多様な変数が考えられ，それらを完全に考慮したうえで分析ができているとは言えない．三つ目は生活保護が必要な生活状況だが受給ができていない人についての検討が出来ていない点である．

6．引 用 文 献

Metzler,M. Merrick,M.T.,Klevens,J.,Ports,K.A.,& Ford, D.C.(2017). Adverse Childhood experiences and life opportunities;Shifting the narrative. Children and Youth Services Review,72, 141－149